

## すべての子どもたちの未来を拓く生き方探究教育とはⅡ

—小学校6年社会科，中学校3年社会科の実践を通して—

巻野 恭明

未来を生きる子どもたちが「生きる力」を身につけ、社会の変化に流されることなく、自立していくこと大切であると考え。生き方探究教育は、すべての教育活動を通して、子どもたち一人一人の生き方や進路と深く結びついている。そこで、今までの教育活動を生き方探究教育の視点に立って、内容を整理し実践することが大切であると考え。

本研究では、子どもたちが自己の将来に関心を持ち、何事にも前向きに生きていくための力を育てる必要があると考え、すべての教育活動の中で、取り組むべき内容を整理し、実践することを通して「全体計画（例）」「学習指導計画（例）」を作成した。

### 第1章 生き方探究教育導入にあたって

#### 第1節 生き方探究教育（キャリア教育）をめぐる背景

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」では、キャリア教育を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と示している。

本市では「地域・社会との関わりの中で生き方を考え、生きる力をはぐくむ」キャリア教育の推進を目指して「生き方探究教育」を示し、個としての自立や他との共生を促す視点から、発達段階を踏まえた学習プログラム（例）を示した。

また昨年度の意識調査の結果から、教職員の多くはキャリア教育の必要性は感じているが、その内容についてはあまり浸透していないことが明らかになった。そのため、何をどう取り組めばよいのかがわからないという現状がうかがえた。

また、子どもたちの意識調査の結果からは、学年進行にとともに、「将来展望」を考える上で「何を考え、何をなすべきか」が見えにくくなっていることがうかがえた。

#### 第2節 生き方探究教育指導計画作成にあたって

本市が大切にしてきた「共生と自立」を柱に、学習プログラムの枠組み例を「共生と自立を柱とする5つの領域と17の力」に組み分けて提案した。

生き方探究教育は、様々な学習や活動を通して、社会との関わりを学び、一人の社会人として自立するための「生き方を考え、生きる力をはぐくむ教育」である。そこで、各教科のねらいや指導計画をもとに、生き方探究教育の視点に立った全体計画（例）や年間指導計画（例）を作成した。

そこでまず、全体計画（例）を作成した。全体計画（例）は、本市「学校教育の重点」、各学校の

学校教育目標との関係をはじめ、教育課程上の位置づけを、生き方探究教育でどのように展開していくかを示した。

次に、各学年における生き方探究教育の年間指導計画（例）を作成した。年間指導計画（例）は、教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などの指導計画にそって作成する。これは、すべての教育活動を、生き方探究教育の視点に立って取り組むことで、指導計画に示した学習内容や学習活動がより充実したものになるとともに「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」視点を身に付けることができると思ったからである。

### 第2章 生き方探究教育の視点に立った社会科学学習の実践例

#### 第1節 小学校6年生の社会科学学習を通して

小学校の授業は、日本の歴史の「3人の武将」の単元を取り上げた。ここでは、3人の武将がその時代を、どのように生き抜き、どのような生き方をしていたのかを調べる活動を設定した。そして子どもたちが、自己の生き方と重ねることで、調べた内容を自己の考える将来像と比較させた。学習では、子どもたちが情報機器を使い、集めた情報から自分にとって必要な情報を選び、ノートにまとめたり話し合いに生かしたりする姿が見られた。

調べ学習では、豊臣秀吉を調べた子どもの中には「秀吉には、よい家来がたくさんいたことで、天下統一を果たせたのではないだろうか」のように、人と人との関わりに着目して考えるなど、興味深い発言があった。また、武将の生き方を、自己の生き方と重ね「自分ならもっと人々のためにお金を使うと思う」などの発言もあった。このように、調べ学習や話し合いを通じて3人の武将の生き方と自分の大切にしたい生き方を重ね合わせながら考える様子が見られた。

また、班や学級の話し合い活動を通じて、お互いの考えを発表しあったり質問しあったりするなど、集団のなかで交流する活動を意識的に取り入れることで、自らの課題や集団の大切さを理解し学び進める姿もみられた。

学習を通して、子どもたちは、3人の武将の生き方を学び、自己の生き方と結びつけて考えることができた。また、子どもたちが、歴史に対して興味を持ち、歴史上の人物の生き方について関心を持つことができたのではないかと考える。

## 第2節 中学校3年生の社会科学習を通して

中学校の授業は、公民分野の「一人の人間としてのわたしたち」の単元を取り上げた。ここでは、『婚姻』を通して、人間は一人で生きていけるかについて話し合い、自分の人生設計を考えさせる活動を設定した。

授業では、まず、教科担任から「結婚について考えていますか」と発問をおこなった。すると、多くの子どもたちから「結婚については考えていない」「まだまだ先の話」などの答えが返ってきた。他に「なぜ結婚年齢が男女で違うのか」「国によっても結婚可能な年齢が違う」などの発言もでてきた。『婚姻』を題材にし、生き方探究教育に視点に立った話し合いを進めることで、将来の自分の姿について真剣に考えることができる学習となった。

また「ルールがなかったら、社会はどうなるだろう」と発問をおこなった。すると「犯罪が多くなる」「自分勝手な人間が多くなる」などのように、社会の秩序が乱れることを危惧する声も返ってきた。しかし、一部には「いいんじゃない」「楽かもしれない」などの答えもあり、ルールの必要性や重要性をあまり認識していない実態があった。そこで、ルールの必要性とともに自分の人生設計について考える活動を設定した。

「一人の人間としてのわたしたち」の単元の学習を通して、自分たちが安心して生きることのできる社会とは何かを考えることができた。またこの学習を通して、子どもたちに、責任を自覚して行動することは、社会を構成する者の責務であることを理解し、社会生活で何を大切にしていかなければならないのかを考えさせることができた。

今回の実践授業では、従来の授業形態を、生き方探究教育の視点に立って、内容を整理し、実践することで関連を図り、自己の生き方を考えさせることができた。そして、人や社会と共に生き、一人の人間として自己実現を図るために、今後の生き方探究教育の視点に立った取組について検討

することができたと考える。

## 第3章 すべての子どもたちの未来を拓く

### 生き方探究教育を進めるにあたって

#### 第1節 生き方探究教育と教育活動

これまで進路指導は、社会の動きに合わせながら、できるだけ個人の希望がかなえられるように取組を進めてきた。しかし、子どもたちの意識調査では「将来何になりたいか」という問いに対し「特にない」「何でもよい」と答える子どもの割合が多かった。子どもたちが目的意識を持たず、何でもよいとって時代に流される生き方は決してよいとは言えないだろう。子どもたちが、自己の生き方を考え、どう生きていくのかを主体的に考えることができるように指導していくことが求められている。

そこで、小学校段階からも、子どもたちの発達にあった「生き方」を考える点に重点を置く必要があると考える。このように、将来を見据えた進路指導こそが、生き方探究教育の視点に立った進路指導であると考えられる。

また、本市が取り組んできた「生き方探究・チ



図1 チャレンジ体験

ャレンジ体験推進事業」で経験したことは、子どもたちが今後の生き方について考える良い機会になる。この体験で得た

様々な情報や経験は、

今後、子どもたちが自身の生き方を考える上で大きな支えになると考える。

#### 第2節 自己実現にむけたさらなる充実

今後、生き方探究教育を進めるにあたっては、子どもたち一人一人の発達を支援し、「生きる」とは何かを考え、学習意欲の向上と確かな学力の向上を図ることが大切であると考えられる。

そこで、本市では「地域・社会との関わりの中で生き方を考え、生きる力を育む」を目指し、職業観・勤労観を図る「キャリア教育」から、自己の将来像を描き、自己実現に向けて、豊かな人間性を育て、個としての自立や他との共生を促す「生き方探究教育」とした。

生き方探究教育を進めるにあたり、教職員自らが生き方を見直し、生き方探究教育の意味を理解することが大切である。そして、子どもたち一人一人の生き方や将来の進路をみつめる、10年後、20年後、50年後の将来を見据えた生き方を支援していくことが必要である。